

## 懐疑と明証

—「第一省察」の叙述形式—

中村文郎

### I はじめに

デカルトの『省察』はモンテーニュが点火したピュロン主義の衝撃の下に書かれており、その叙述形式も懐疑主義の論理構成を不断に顧慮せざるをえない立場に置かれていた。このため特に「第一省察」の懐疑主義的議論は、ポプキンによれば、伝統主義者とピュロン主義者の両陣営から不評を招くことになった<sup>1)</sup>。当時ピュロン主義者は自由思想家と同一視され、そして自由思想家は日常語としては道徳的に放縦な人々と解されていたので、伝統主義者は「第一省察」の議論を道徳的に危険だと警告したのである（「第七反論」）。これに対してピュロン主義者は、出発点の表面上の類似のために、「第一省察」に対しては概ね好意的であるが、しかし簡単な論評しか残していない（「第三反論」「第五反論」）。彼らの論評全体の趣旨は、ピュロン主義の立場からみて、「第一省察」は不徹底であり、残りの五つの省察は到底許しがたいという点にあった。両陣営に共通しているのは、「第一省察」が完全にピュロン主義的精神の下で叙述されているという見解である。

けれども、誰の眼にも明らかなように、『省察』は懐疑主義の克服の記録なのである。デカルト自身、自分の懐疑を方法的懐疑と特徴づけることによって、「ただ疑わんがためにのみ疑う」ピュロン主義的懐疑を棄却している（VI, 29）<sup>2)</sup>。実際デカルトの懐疑が方法的である所以は、それが懐疑そのものを終

結させる自己否定の契機を操作的に含む点にある。懐疑が破局を迎えるのはコギトの明証によってであるが、「第一省察」はまだこの明証を知らない。懐疑とは明証性の探究であり、つまりは明証性に対する無知の告白に他ならないからである。とはいえ、懐疑は明証性を戦いとらなければならない。したがってコギトの明証を準備するのは、「第一省察」の懐疑の論理構成そのもののうちに内在していなければならないのである。

## II 懐疑と擬似的明証

デカルトは「良識はこの世でもっとも公平に分配されているものである」という有名な一行から『方法叙説』を書きおこしている。ここで「良識」とは「正しく判断し、真偽を弁別する能力」のことである。この能力が各人において平等であるという点について、「ピュルマンとの対話」のなかではおおむね次のような説明がなされている。知能や記憶力は各人によって優劣の差がある。しかし判断すなわち意見を述べる適性という点では能力の差はない。というのも、デカルトによれば、「誰にとっても自分の意見 (sententia) は好ましいものだし、頭の数だけ考え (sententia) もあるからである」(V, 175)。頭の数だけ考えもあるというのは、つまり十人十色だということであろう。そうだとすると、『方法叙説』の冒頭の一行は各人が各人なりの意見もっているという前学問的事実の確認、しかも真理の探究を標榜する『方法叙説』にとってはネガティブな事実の確認にすぎないということになる。なぜなら、各人が各人なりの意見もっているということは、各人が各人の意見を真理だと思いなしていることに他ならないし、したがってそれは真理の一種の無政府状態を意味するからである。それゆえ、良識の公平な分配という事実の確認は直接にはデカルトの哲学の出発点にはなりえない。よく知られているように、「健全な精神もっているというだけでは十分でない」ので、大切なことは「それを正しく使用すること」なのである。この「正しく使用する」という言い方はデカルトの言う「良識」がいわゆる理論理性に限定されないということを示している。というのも、デカルトは引き続いて

「最も偉大な人間でも最大の悪事を行うことができる」と言葉を継いで、良識の言わば悪用を暗に戒めているからである。いずれにせよ、『方法叙説』とはまさしく「自分の理性を正しく導いて、諸学問 (sententia—筆者) における真理を探究するための方法の叙説」<sup>3)</sup> である。良識はそれだけでは単に真理の無政府状態を意味するにすぎないので、良識を良識たらしめる方法から、つまり十人十色の *Ies vérités* ではなく、*la vérité* を探究するための方法から分離されえないのである。

その方法的規則の第一条としてデカルトはいわゆる明証性の規則を掲げていた。「明証的に真であると認めない限り、いかなるものも真として受け入れられないこと、速断と予断とを注意して避けること、何ら疑う余地もないほど明晰判明に私の精神に現れるもの以外は私の判断のうちに取り入れられないこと」(VI, 18) というのがその規則の内容である。ここには三つのことが言われている。第一はこの規則が目指す目標であって、それは言うまでもなく明証性である。第二に、この目標を達成するにあたって生ずるかもしれない障害について述べられている。すなわち速断と予断を避けなければならない。最後に、このような障害を避けて、所期の目標を達成するための手段が語られている。速断と予断を避けるということは、さしあたっては、ピュロン主義のように判断を停止するということである。しかしいつまでも停止しっ放しというわけではない。いつまで判断を停止するかと言えば、それは「何ら疑いをさしはさむ余地がないまで」である。したがって、明証性はデカルトにとって真理の規準であり、そして明証性の度合は懐疑に対する抵抗度に比例する、とさしあたり言うことができる。

ところで、明証性の規則が主観的心理学的な真理基準にすぎないという非難はすでにデカルトの存命当時から行われていて、『省察』に対する「第二反論」(126)、「第三反論」(191—192)、「第五反論」(277—279) のうちにその例をみることができる。例えばホブスは明晰判明な知覚と「頑迷な意見」とは区別できないと主張しているし、またガッサンディも「各人は自分が支持する意見をそれぞれ明晰かつ判明に把握していると考える」と反論を加えている。しかしながら、『方法叙説』はまさしくそうした前学問的事実——各

人が各人の意見を真理と思い込んでいる——の確認から始まっていたのである。更にガッサンディは明晰かつ判明に把握されたものが後になって間違いであることが分ったという経験を引き合いに出して、明証性の規則の有効性に疑義をさしはさんでいるが、しかしまさしくこのような誤謬の経験こそデカルトが『省察』を書くに至った経緯であった。「第一省察」はこう書きおこされている。「すでに数年も前のことであるが、私が若いころいかに多くの偽なるものを真なるものとして認めてきたか、またそれらのものの上にその後私が築きあげたものがどれほど疑わしいものであるか、またそれだからもしいつか私が学問において何か確固とした持続的なものを確立しようと欲するならば、一生に一度はいいさいのものを根底からくつがえして、最初の土台からやりなおさなければならない、と私は気づいたのであった」。してみれば、デカルトの哲学の実際の出発状況を規定しているのは、真実ではないが真実だと思われる事柄、真実であるかもしれないが根拠づけを欠いている意見、つまり擬似的な明証なのである。デカルトの省察の企図はまさしくそうした明証の擬似性を暴く点にあった。そのための方法が懐疑であったわけである。したがって、ホッブスやガッサンディの非難はそれ自体としては正当であるが、しかしデカルトの方法的企図にまで届いていないと言わなければならない。

### III 懐疑と否定

デカルトは「第七反論」に添えた「備考」(481)のなかで次のような比喻を用いて、彼の哲学の言わばスタイルを説明している。リンゴで一杯の籠があるとす。そのうちの何個かが腐っているのではないかと疑い、それらが他のリンゴまで腐らせてしまうのではないかと心配する人はどう振舞うであろうか。何よりもまずその籠を空っぽにするのではないか。その後ですべてのリンゴを一箇ずつ眺め渡して点検し、腐っていないリンゴだけを選び出すのではないか。そして他のものは捨てて、その選び出したリンゴだけ籠のなかに詰め直すのではないか。「それとまったく同じように、よく哲学したこ

とのない人たちは、幼年時代から自分の精神のなかに蓄積してきた様々な意見をもっていて、その大部分が真でないのではないかと理性を用いて気づかうとともに、それらの意見の混合のために全部の意見が不確かなものになるのではないかと心配して、真でない意見をその他の意見から分離しようと努める。このような場合、それらの意見全部が虚偽で不確実であるわけではないけれども、欺かれないためには、それらすべてを一挙に放擲し、次いでそれらを順序に従って逐次吟味して、真実で不可疑的だと認められるものだけを再び取り戻す以外に手だてはないであろう。

籠のなかに「腐ったリンゴ」と「腐っていないリンゴ」が詰まっているように、我々の「精神」のなかには「真である意見」と「真でない意見」が詰まっている。その両者を見分けるにはどうすればよいかということがここでのデカルトの比喻の眼目になっている。注意したいのは、デカルトは籠のなかに「腐ったリンゴ」があるとは断定してはいないということである。「あるのではないか」とデカルトは疑っているだけである。したがって、籠のなかのリンゴが実際にはすべて腐っていないこともありうるわけである。この時点ではデカルトは単にピュロン主義的な懐疑のうちにとどまっていると言える。つまり彼は「腐ったリンゴ」が存在するかどうかについては肯定も否定もせず、単に判断停止を行っているにすぎない。ところが、デカルトが籠を空っぽにして中身を一挙に放擲するとき、彼はもはや疑っているのではなく、はっきりと否定的な断定を下しているのである。なぜなら、籠の中身を放擲することは、中身がすべて腐っていると断定することに他ならないからである。したがって、グイエが指摘しているように<sup>4)</sup>、方法的懐疑のうち二つの操作を、つまり判断停止と否定とを区別するのがよいであろう。その場合、否定とは可疑性と虚偽性との同一視を指す。例えばデカルトは『方法叙説』で「少しでも疑いをさしはさむ余地のあるものは全部絶対的に虚偽なものとして放棄しなければならないと考えた」(VI, 31)と述べている。言うまでもなく、或るものが可疑的であるということはその真偽が疑わしいということに他ならない。換言すれば、可疑的なものは真でも偽でもありうる。したがって疑わしいものがすべて虚偽だというわけではない。しかしながら、

わずかでも疑いをさしはさむことができるなら、それを絶対的な虚偽として否定するのがデカルトの哲学のスタイルなのである。

否定はもとより意思の働きである。周知のように、デカルトにおいては、意思の無限性が知性の有限性を踏み越えて判断する点に誤謬が成立するのであるから、デカルトが否定を行うとき、誤謬を犯している可能性は十分にあると考えなければならない。事実、「第一省察」でデカルトが行った否定はすべて誤謬であることが「第六省察」において明らかにされる。例えばデカルトは「世界のうちにはまったく何もものない。天も地も精神も肉体もない」と主張する。この主張は「第一省察」においては真理（正確に言えば、次節でみるように、真でも偽でもない）であるが、「第六省察」においては誤謬である。但し、この誤謬は意思された誤謬であることに注意する必要がある。デカルトは『方法叙説』のなかで「私は自分の精神のなかにはいりこんでいたすべての事柄を夢のなかの幻想と同じように真実でないと feindre しようと決心した」と述べている。この feindre は「よそおう」「ふりをする」という意味である。したがってデカルトが単なる判断停止の段階を越えて否定にまで突き進むとき、それはただ単に「擬装された」ものだと考えなければならない。むしろこの点にデカルトの議論の進め方の核心があると思われる。「省察」の水準というものがあるのであって、同一の主張でも水準の違いによって真ともなれば偽ともなるのである。ということは、第一原理が確立される以前のデカルトの哲学的主張つまり「第一省察」の全体はそれ自体では真でも偽でもないということに他ならない。「天も地も精神も肉体も存在しない」というデカルトのいわゆる「誇張された懷疑」は単に擬装されているにすぎない主張なのであって、その真偽はこれから吟味されなければならない問題なのである。

「第一省察」に関してガッサンディは「精神を一切の偏見から解き放すことを欲した」デカルトの企図を全体として諒としながらも、「ただ次のひとつのことだけが私にはよく分らない」と述べている。ガッサンディにとって「不確実である」ということと「虚偽である」ということとはまったく別のことである、不確実なものは不確実である、疑わしいものは疑わしい——と、

このように言うだけで十分ではないか。何ゆえに不確実なもの、疑わしいものを絶対的な虚偽として排斥しなければならないのか。こうしてガッサンディに言わせれば、「事柄をありのままに真面目に且つ単純に述べることの方がはるかに哲学的公明性と真理への愛とに相応しいことであったでしょうに」(258)ということになるわけである。してみると、ガッサンディはデカルトの懐疑が判断停止と否定というふたつの操作から成り立っていることは理解している。しかし、このふたつの操作を切り離すなら、デカルトの懐疑がまさしく「方法的」ではなくなるということを理解していない。或いはむしろ理解することを拒んでいると言った方がよいかも知れない。というのは、後年ガッサンディは『省察』に対する自分の反論を検事の論告求刑に見たて、デカルトの答弁を被疑者の最終弁論に仕立て変えた上で、自らは判事を装って「審理」と題する再度の反論を試みているが、そこでは彼はデカルトの懐疑の特質をなす否定的操作に対して自らのピュロン主義的立場を頑固に繰り返しているだけだからである<sup>5)</sup>。けれども、方法的懐疑からその否定的性格を取り除くならば、『省察』の叙述そのものが成り立たないのである。

このことはガッサンディがデカルトのコギトの命題を論評するときにも明らかである。彼は「あなたが存在することは他の根拠からもあなたにとって確かであった」と述べた上で、その「他の根拠」の一例として「すべて活動するものは存在する」という命題を挙げている(259)。たしかにデカルトもまたコギト以外の活動から、例えば「私は歩く」という活動から「私の存在」を導出したことがある(「第五答弁」『哲学原理』)。けれども、その場合、但し書きがついている。「私は歩く」から「私の存在」を導出するのは、私が歩くことのコギトである限りにおいてなのである。ガッサンディの言う「他の根拠」はすべてコギトの裏打ちがなければ根拠たりえないとデカルトは主張するのである。言うまでもなく、その「他の根拠」は真理であるかもしれない。それは籠のなかから一挙に放擲したリンゴのなかに腐ったリンゴが皆無であるかも知れないと同様である。しかしそれは可疑的である、疑おうと思えばいくらでも疑いうる(その理由については次節で述べる)とデカルトは考えるのである。そして、疑いうるもの、疑うべき理由があるものにつ

いては、たとえそれが後になって真理であることが判明するようなことになろうと、さしあたっては絶対的に虚偽であるかのように振舞うのがデカルトの哲学のスタイルなのである。

#### IV 懐疑理由の構成

明証的であるということと、疑うことができないということとは、デカルトにとってまったく同一の事態を言い表わしている。しかし懐疑とはまさしく明証性の探究に他ならないのであるから、デカルトは実際に懐疑を実施するにあたって、明証性そのものを利用するわけにはいかない。なぜなら疑うということは明証性が何であるかを知らないということの意味するからである。事実、デカルトが「明晰判明に知覚されるものは真である」という命題を明証性の一般的規則として立てるのは、「第三省察」の冒頭においてである。それゆえデカルトは「第一省察」では疑うための拠り所を懐疑理由に求めている。「まったく確実でなく、疑うことができないのではないものに対しては、明白に虚偽であるものと同じように、同意を差し控えるべきであり、したがって検討すべき意見のいずれかに何らかの懐疑理由を見出すなら、すべてを斥けるに十分である」(18)。デカルトはこれに引き続いて、「土台を掘り返せば、その上に建てられたものはことごとくひとりでに崩れ落ちるのであるから」「すべての意見をひとつひとつ調べまわる必要はない」と述べているわけだが、この掘り返すべき「土台」——それは疑うことを決意する以前にデカルトが依拠していた認識原理（「かつて私が信じていた一切のものが依拠していた原理そのもの」）に他ならない——は、「第一省察」の議論全体を通じて、感覚と知性のふたつに分けられている。「第六省察」では想像力に対して感覚や知性とは異なる独特の役割が与えられることになるが、「第一省察」においては想像力のもっぱら現実的な基盤ないし感覚的な根拠だけが問題にされているので、ここでは想像力は除外して考察することにする。

認識の原理ないし根拠が感覚と知性であるとする、これに対応する認識

をそれぞれ感覚的認識と知性的認識と呼ぶことができる。認識といっても、「第一省察」のデカルトにとってはまだその真偽が不明な認識、つまりは疑いをさしはさむ余地のある意見にすぎないわけだが、それが疑わしいことの理由としてデカルトは周知のように次の四つを挙げていた。すなわち、錯覚、夢、計算間違い、邪霊の四つである。まず感覚的認識に対しては、錯覚と夢というふたつの懷疑理由によってそれが可疑的であることが示される。個々の感覚的認識のみならず、それを拠り所にしての学問的認識（デカルトの挙げて例では、自然学、医学、天文学等）もまた斥けられる。次に知性的認識に対しては、計算間違いと邪霊の懷疑理由によって、その認識の体系である数学と論理学が斥けられる。以下、これら四つの懷疑理由が提出される「第一省察」の論理構成を明らかにしてみたい。

a 錯覚。この懷疑理由については、よく知られていることなので、デカルトのテキストを引用するにとどめる。「これまで私のもっとも真なるものと認めてきたものは、いずれもこれを私は感覚から受けとるか、または感覚を介して受けとるかしたのであった。ところがこの感覚は時として欺くものであることを私は見てとった。そしてたった一度でもわれわれを欺いたことのあるものには決して全幅の信頼を寄せないのが賢明なことである」(18)。

b 夢。個々の感覚的認識があてにならないということは、われわれが時折日常的に経験する事実である。けれどもそのことから直ちに感覚的認識一般が誤謬だという結論を下すことができるわけではない。感覚は現時的なもの、アクチュアルなものであって、アクチュアルな明証は否定できないのだから、感覚的明証それ自体はつねに圧倒的な迫真性をもっている。デカルトによれば、「例えば、いま、私がここにいる、暖炉のそばに坐り、冬上着をつけ、この紙片を手にしてるといった類のこと」、換言すれば現時的な経験は「まったく疑うことのできないようなもの」であって、それを否定しようとするのは狂気の沙汰である(18)。「信じられないような光景」とか「我が眼を疑う」といったような表現はアクチュアルな経験に対する懷疑的状况の設定に他ならないが、しかしそ

の懐疑を生み出す要因となった現時的な経験自体は否定することができない。なぜなら、その経験がなければ、つまり眼の前に繰り広げられている光景をいったん信じたのでなければ、それに対する懐疑も生じなかったはずだからである。したがって、ただ単に「錯覚」という懐疑理由だけでは感覚的認識一般を否定することはできない。

しかるに、「夢」においては、経験のアクチュアリティ自体が文字通りアクチュアルな根拠をもちえない。おそろしい夢をみて、われわれが汗を掻いたり不覚の声を発したりするのは、夢がまさしく迫真的だからだが、しかしいかに真に迫っているようにみえるにせよ、それは飽くまでも夢にすぎない。したがって夢の経験は個々の感覚的経験のもつ迫真性を否定するための懐疑理由を構成する。個々の感覚的認識がそのアクチュアルな迫真性にその成立根拠を仰いでいるとすれば、夢の懐疑理由は感覚的認識一般の成立根拠を疑問に附していると考えることができる。

ホッブスはデカルトの以上のような議論に対して「そのような陳腐な事柄を吹聴するようなことは差し控えていただきたい」と苦言を呈している(171)。なるほど、ホッブスが指摘するように、感覚の不確かさについてはすでにプラトンがこれを論じていたし、何よりセクストスがその『ピュロン哲学の概要』のなかでデカルト以上に精緻に論じていた<sup>6)</sup>。けれども、重要なことはデカルトはここで感覚に対する懐疑理由を並べたてているだけだということである。感覚的認識の真理性が否定されるにしても、それは擬装された否定にすぎない。そうでないとすれば、われわれは「第六省察」の叙述を理解できないであろう<sup>7)</sup>。デカルトはホッブスの指摘を一応認めた上で、「あたかも医術を論ずるものが病の治療法を教えたいと思えば、当の病についての叙述を省くことができないように、右の検討を省くわけにはゆかなかった」(172)と答えている。これは或る意味では非常に皮肉な答弁である。なぜなら、ホッブスは「第一省察」の真理性を認める旨の発言をしているが(171)、しかしデカルトに言わせれば、「第一省察」は言わば病的な魂の妄想の記録であって、そこには何らの真理も含まれていないからである。事実、「第六省

察」において「第一省察」の記述の不真理が明らかにされる（89—90）。してみるとホッブスは少なくとも「第一省察」の議論が擬装された議論だということを理解していないように思われる。懷疑理由とは或る命題に対してそれとは反対の命題が成立しうる、その単なる論理的な可能性にすぎないので、それ自体は真理である必要はない。デカルトによればそれは単に「擬似的真理」(verisimiles) である（171）。デカルトの議論の進め方は、或る命題（例えば「私はいまここに暖炉部屋にいる」）が可疑的である理由（この場合「夢」）を示しておいて、その懷疑理由に省察を加えてゆき、そしてその結果、懷疑理由が自己矛盾に陥るならば、懷疑理由そのものが理由を失うことになるから、そこに真理（後に否定されるが、この場合とりあえず数学的真理）が確立される——という、そういうやり方である。したがって懷疑理由あるいは或る意見に対する反対意見それ自体は真理である必要はないのである。

- c 計算間違い。この懷疑理由は「第一省察」では邪霊の懷疑理由を引き出すための呼び水としてしか用いられていないが、やはり独立した懷疑理由を構成すると考えるべきである。この点からみると『方法叙説』の叙述の方がすぐれている。「それから私は、幾何学上のもっとも単純な事柄に関してさえ、推理をまちがえて背理におちいる人がいるのだから、自分もまた他の人と同様間違いを犯しかねないと判断して、以前は論証とみなしていたすべての論拠を虚偽として捨ててしまった」（VI, 32）。この懷疑理由は、感覺的認識に対する懷疑理由のうちで「錯覚」が果していたのと同じ役割をもつ。すなわち、計算間違いは個々の知性的認識に対する懷疑理由を構成するとみてよい。
- d 邪霊もしくは欺く神<sup>8)</sup>。懷疑理由が真理である必要はないということは、この懷疑理由からも明らかである。この懷疑理由は、〈全能の欺く神が存在し、この神は2プラス3は5ではないようにすることもできるのだから、 $2 + 3 = 5$ は可疑的である〉というものである。言うまでもなく、デカルトにとって神は最終的には誠実であるのだから、欺く神が存在するという命題は真理ではない。しかし、この命題の真偽や「2プ

ラス3は5ではない」という結論の真偽を問題にすることは「第一省察」の仕事ではない。デカルトは神が欺くはずはないという前提から出発するのではない。全能の神にしても、「第一省察」のデカルトにとっては、「古くから私のところにこびりついている意見」にすぎない。「第一省察」の水準においては、神の存在ですらひとつの意見にすぎず、この意見の真偽は省察の歩みのなかでこれから吟味されなければならない問題なのである。

「夢」が感覚的認識一般に対する懐疑理由を構成するのに対応して、「邪霊」は知性的認識一般に対する懐疑理由を構成する。知性あるいは理性に対するこれほどまでの懐疑を表明したのは、デカルトが最初にして最後であったと言ってよいかもしれない。デカルト以降、哲学は現代に至るまで理性に対する或る種の形而上学的不安を払底できないでいるが、しかしこの不安をデカルト以上に見事に根源的に主題化した哲学者はいないと思われる。例えば、今世紀にはいって、フッサールがヨーロッパ諸学問の危機を訴えたが、彼において問題になっていたのは、学問の、それもヨーロッパの学問の危機であって、理性そのものの危機ではなかった。彼は理性の建て直しを図ることによって学問の危機を克服することができると考えていたのである。いずれにせよ、理性的明証を疑うということは容易ならざることであって、デカルトは「自分の意思に背いてでも」この懐疑を実行するのだとその決意のほどを示している。デカルトは「一生に一度はすべてを根こそぎくつがえし、最初の土台から始めなくてはならない」と述べていたが、いまやたしかにすべてが「根こそぎ」くつがえたのである。この完全な不真理の「暗闇」のなかに一条の光をたずねあてるためには「第二省察」を俟たなければならない。

#### 注

- 1) R. H. Popkin, *The history of Scepticism from Erasmus to Spinoza* (Univ. California Press), pp. 193—213.

- 2) デカルトからの引用はアダン・タヌリ版の全集に従って巻数と頁数をそれぞれローマ数字とアラビア数字で示す。但し、『省察』を収めている第七巻については頁数のみ示す。
- 3) 『方法叙説』の正式な書名。
- 4) H. Gouhier, *La pensee metaphysique de Descartes* (Vrin), pp. 23-31.
- 5) P. Gassendi, *Disquisitio Metaphysica* (Vrin), pp. 280 a-281b. Art.3. Art. 4.
- 6) セクストス・エンペイリコス『ピュロン哲学の概要』(筑摩書房) 藤沢令夫訳。第十四章。pp. 224 - 243.
- 7) 「第一省察」と「第六省察」は両立しないというのが大方の見解である(例えば、メルロ・ポンティ『心身の合一』朝日出版社、滝浦静雄他訳。p.20.)。けれども、別稿で詳述する予定だが、両者は省察の水準を異にしているのである。
- 8) グイエは「邪霊」と「欺く神」とを区別すべきだと主張している。本稿では特に区別しないが、首肯すべき主張である。H. Gouhier, *Descartes, Essais ...* (Vrin), pp. 162 - 163.

(筆者 岩手大学人文社会科学部助教授)